

男は本当におしゃべりか？

小林美恵子

1 はじめに

最初に小論を書くことになったきっかけを述べておこう。

わたしは昨年、「ことば」18号に「自称の獲得」と題して、高校生の自称代名詞の使用状況についての調査結果を発表した（小林1997）。その中で男性の自称詞が女性に比べて、時や相手による使い分けをせざるを得ない状況であることを明らかにした。また、その結果、子供からおとなへの過渡段階にある高校生の男子にとっては、話し相手や場によってどのような自称詞を選ぶかという点において、いわば常にストレスにさらされなければならないような状況があることを報告し、このことが男子高校生の言語表現そのものを阻害している可能性もあるのではないかと考えた。これは、私自身の教師としての体験の中で、男子生徒の発言においてしばしば、誰が何をしたのかという点が不明瞭であったり、また、ほとんど人と話しをしないような無口あるいは寡黙といえる生徒が女子よりは男子に圧倒的に多いという印象を裏付ける結果でもあった。

この論文を発表後、さまざまなご批評・批判をいただいたが、その中で、わたし自身が深く考えさせられたのは、「男子生徒が無口・寡黙で言語表現が拙ないというのは、ステレオタイプの見方であり、思い込みではないか。仮に筆者の体験において、そのような傾向はあったとしても、それは女性教師対男子生徒という特殊な関係におけるものであり、男子は男どうしではむしろおしゃべりなものだ」という、ある男性からの批判であった。日頃ステレオタイプな見方を自らに戒めている者として、些かドキリとさせられたのでもある。

「沈黙は金」「不言実行」（これらの古来からの格言は、いうまでもなく、女ではなく男の処世を説いたものであろう）にはじまって「男は黙って〇〇

ビール」まで、男性の無口を称揚する言は多いのであるが、いっぽうで男性の中に「雄弁」を価値あるものとする伝統があるのも確かである。話すことがその重要な仕事である政治家にしても弁護士・評論家やアナウンサーにしても、近年こそ女性の活躍も目立つとはいえ、元来は男性中心の職業であった。落語、講談また座敷芸としての割間の話芸なども男性のものである。

女性のほうは三人よると「姦ましい」などと言われ、やはり「おしゃべり」なのではあろうが、これはあくまでも私的なもので、職業とか公的な場での発言に結びつくものではないらしい。女が職業生活や公的な場であまりに雄弁であることは、少なくともひと昔前までは決して価値のあることとはされなかった。「黙って」男の言うことを聞き、男についていくような女性がよしとされたのである。こうして見ると同じ「しゃべる」ということであっても男性がしゃべるべき場と女性がしゃべってもいい場というのは大きく隔たっていたとも言えるわけである。

ところで、先の批判者の論点は、これらの旧来的な男女の「しゃべり」状況に基づくものではない。生徒から教師へ語りかけというのは、もちろん私的なおしゃべりの入り込む要素もあろうが、基本には男性の「本領」である公的な会話である。いっぽう男どうしのおしゃべりは、やはり私的なおしゃべりというべき分野のものだろう。批判者は、男は公的なしゃべりはともかくとして、私的なおしゃべりはよくするものなのだと断言しているのである。

実際に男性はおしゃべりなのか。もちろん個人差は当然あるのだが、話すことについて、意識や行動面で女性との傾向差があるのだろうか。自称獲得段階で、表現的にはハンディを負っていると、筆者が考える高校生について、アンケート調査を試みた。

2 調査の概要と結果

この調査は1998年2月から3月にかけて、東京都多摩区の高校1年生、男子96名、女子94名に行った。この対象集団は、(小林1997)の調査対象と同じメンバーである。(今回は男女それぞれ3名ずつが不在で調査できなかった

たので人数は減っているが。) 質問については大きく3つのパートにわけた。
すなわち、

- A 「おしゃべり」「雑談」についての意識と実態
- B 電話によるコミュニケーションについて
- C 文章によるコミュニケーションについて

である。小論ではおもにAについて結果を考察し、BCの結果とそれがどう関連しているかについても触れることとしたい。

Aについては、次の7問に選択肢を用意して回答を求めた。

- ①友人や家族と「おしゃべり」または「雑談」をすることが多いか？
- ②「おしゃべり」または「雑談」が好きか？
- ③人に「おしゃべり」と言われたことがあるか？
- ④初対面の人に自分から話しかけることが多いか？
- ⑤友人との会話で、自分が話題を提供することが多いか？
- ⑥目上の人やあまり親しくない人とあらたまった話題ではなさなくてはならないときどう感じるか？
- ⑦友人と議論をすることが多いか。

①および②で「おしゃべり」と「雑談」をならべて問うたのは、「おしゃべり」という語の含意が、「よくする」「好き」とは言いにくい面をもつことを警戒したためである。調査にあたっては「気楽な会話」ということも含めて考えるよう示唆した。高校1年生の段階ではある程度具体的な状況を示唆しないと、回答自体を得にくい場合がある。例えば④では、「街で道がわからないとき、地図や町名表示を探すなどして人にはなるべく聞かないか、それとも、教えてくれそうな人に聞くか」「自分の最も望む種類の飲物がなくても自動販売機で買うか、それとも店の人に尋ねるか」という例をあげて考えさせ、⑦では友人と意見が食い違う場合に、その話をやめたり、妥協するのか、それとも意見を闘わせることが多いかと、多少具体的に聞くように

した。

さて、いずれの問いに関しても、回答は表1～3のように選択肢を用意して、答えてもらった。

2.1 「おしゃべり」についての意識

①と②についてはほぼ同じような結果を得た。(表1)

(表1)

①友人や家族と「おしゃべり」または「雑談」をすることが多いか？

よくしゃべる	女子	84人 (89.4) %	男子	62人 (64.6) %
たまにはしゃべる		6人 (6.4)		27人 (28.1)
あまりしゃべらない		0人 (0.0)		2人 (2.1)
ほとんどしゃべらない		0人 (0.0)		2人 (2.1)
わからない・その他		4人 (4.3)		3人 (3.1)

②「おしゃべり」または「雑談」が好きか？

好きである	女子	73人 (77.7) %	男子	55人 (57.3) %
苦にはならない		15人 (16.0)		36人 (37.5)
あまり好きでない		1人 (1.1)		2人 (2.1)
嫌いである		1人 (1.1)		0人 (0.0)
わからない・その他		4人 (4.3)		3人 (3.1)

表で見るとおり①「よくしゃべる」②「おしゃべりが好きである」に関しては女子のほうが多く、女子のほうがよくしゃべり、またしゃべることが好きであるという結果である。しかし①「たまにはしゃべる」②「しゃべるとは苦にはならない」というものまで含めると①では女子95.8%、男子92.7%、②では女子93.7%、男子94.8%となり、男女間の差はほとんど見られないといってよい。男女ともに「あまり(ほとんど)しゃべらない」「しゃべることが好きでない」としたものは1～2%の範囲にとどまっている。

2.2 他者からの評価

ところで、自分が「よくしゃべる」とか「しゃべらない」と考えることと、実際にはしゃべっているかどうかは必ずしも一致するとはかぎらない。そこ

で、③では自分が他者にどう評価されているかを聞いてみた。(表2)

(表2)

③人に「おしゃべり」と言われたことがあるか?

よく言われる	女子 17人 (18.1) %	男子 11人 (11.5)
たまに言われる	32人 (34.0)	15人 (15.6)
あまり言われない	20人 (21.3)	35人 (36.5)
言われたことはほとんどない	21人 (22.3)	26人 (27.1)
わからない・その他	4人 (4.3)	9人 (9.4)

人に「おしゃべりだ」と言われるかどうかについて、「よく言われる」「たまに言われる」を合わせると女子は52.1%、男子は27.1%と女子のほうがおしゃべりであるという評価を受けている。このうち「よく言われる」とした男女28人は①では例外なく「自分はよくしゃべる」と答え、②でも男女それぞれ1人ずつを除いて「しゃべるのが好きである」と答えている。また、③でおしゃべりと「よく言われる」「たまに言われる」と答えた男女計75人のうち、「しゃべることは嫌いである」としたものは男子1名のみで、69人までは「よくしゃべり」61人までは「好きであり」残りは「たまにはしゃべり」「苦にはならない」ということで、他者の評価と自己評価に大きな食い違いは見られないことになる。

もともと、自分では「よくしゃべり」「しゃべるのが好き」と思っていながら、「おしゃべりと言われたことがあまり(ほとんど)ない」者ももちろん多い。全体的に「しゃべること」に対する忌避感の比較的希薄な集団であるから、これは当然のことであろう。ちなみに①で「あまりしゃべらない」「ほとんどしゃべらない」と答えた4名のうち②で「しゃべるのが好きである」ものが1名、残り3名は「苦にはならない」とし、逆に②で「あまり好きでない」「嫌い」と答えた4名も①では「たまにはしゃべって」いる。好き嫌いと実際の行動が結びついていないことがわかる。

2.3 具体的な言語行動に関する意識

④⑤⑥⑦はそれぞれ具体的な言語行動のなかでどのような態度をとることが多いかを聞いてみたものである。(表3)

(表3)

④初対面の人に自分から話しかけることが多いか?

よく話しかける	女子	11人 (11.7) %	男子	15人 (15.6) %
たまに話しかける		66人 (70.2)		48人 (50.0)
なるべく話しかけない		17人 (18.1)		31人 (32.3)
わからない・その他		0人 (0.0)		2人 (2.1)

⑤友人との会話で、自分が話題を提供することが多いか?

提供することが多い	女子	38人 (40.4) %	男子	31人 (32.3) %
たまには提供する		51人 (54.3)		52人 (54.2)
自分からは提供せず人の 話題に合わせることが多い		2人 (2.1)		7人 (7.3)
ほとんど提供しない		0人 (0.0)		1人 (1.0)
わからない・その他		3人 (3.2)		5人 (5.2)

⑥目上の人やあまり親しくない人とあらたまった話題で話さなくてはならないときどう感じるか?

特に苦にはしない	女子	31人 (33.0) %	男子	37人 (38.5) %
どちらかといえば億劫		31人 (33.0)		24人 (25.0)
できれば話したくない		29人 (30.9)		31人 (32.3)
絶対に話したくない		0人 (0.0)		0人 (0.0)
わからない・その他		3人 (3.2)		4人 (4.2)

⑦友人と議論をすることが多いか。

よく議論する	女子	13人 (13.8) %	男子	18人 (18.8) %
たまに議論する		42人 (44.7)		51人 (53.1)
なるべく議論にならない ようにする		22人 (23.4)		13人 (13.5)
議論はほとんどしない		17人 (18.1)		12人 (12.5)
わからない・その他		0人 (0.0)		2人 (2.1)

④では、男子は初対面の人によく話しかけるというものも多い反面、なるべく話しかけないというものも多く、「よく話しかける」「たまに話しかける」を合わせると女子81.9%、男子65.6%という結果である。

⑤の話題の提供についても、「提供することがある」ものが女子94.7%、男子86.5%。また自分から話題を提供することはあまりしないというものが、男子の8.3%に対し女子2.1%と、あきらかに女子が話題を提供し会話をリードする傾向を示している。従前の談話分析によれば、しばしば男性の会話には「割り込み」が多く、また男女間の会話では発言権や話題の選択権が男性によって支配されるという（重光1993など）。話題の提供も、このような会話管理意識の一端に現れるものだと考えられるが、本調査は従前のものとは異なる結果を示している。もちろん意識と実際の傾向は必ずしも一致するものではないし、実際の会話の相手によって意識そのものも常に不変ではないわけだが、一般的な会話を想定した場合に、女子がかなり強い話題提供の意識を持っていることは興味深い。

さて、以上の①～⑤では、いずれにおいても、男子との間にそれほど大きな差はないものの、女子のほうが「しゃべる」事に対してより積極的な傾向を示している。ところが次の⑥⑦ではまったく逆の傾向が現れている。

⑥は目上の人やあまり親しくない人とのあらたまった話題での会話に対する意識であるが、「特に苦にはしない」と答えたものが男子には多く、「どちらかといえば億劫」「できれば話さず済ませたい」としたものは女子のほうに多いという結果である。また⑦の議論についても、男子のほうが積極的で、女子はどちらかという議論を避けようとする傾向にある。

⑦はともかくとして、⑥の結果は少々意外なところであった。男性の自称の獲得過程における選択の難しさが、もっとも現れるのは⑥のような会話の場であり、その結果が表現の稚拙さという形で現れているのではないかというのが（小林1997）の考察のひとつであった。それは書き言葉においてではあるが、自称変化にともなって文体変化がおこるという点からも確かなことと考える。これは高校生と日常接触している立場での実感でもあるし、また先の批判者もこの点について、特に否定をしたわけではない。

それにもかかわらず、男子高校生自身が、目上とあらたまった会話をすることにさほどの抵抗を感じていないというのは非常に興味深いことである。表現技術のレベルとは別に、男性のいわば公的な会話への志向の強さが現れていると見るべきなのかもしれない。

2.4 電話・文章コミュニケーションとの関連性

Bでは電話、Cでは文章によるコミュニケーションの量や内容について、男女それぞれがどのような状況にあるのかを聞いた。若い人々が、毎日会っているような友人間で長電話をすることは、しばしば言われる。またある時期、手紙を書かなくなった、日記や文章もあまり書かないという形での活字離れもよくいわれたが、これについては、パソコンやファックス・電子メールなど、新しい文章機器やコミュニケーション媒体の発達・普及によって変わってきている面もあるのではないだろうか。

電話で会話をするにしてもファックスや電子メールを送るにしても、他者に対する言語による働きかけがあるわけで、これは広い意味では「おしゃべり」と言ってよいだろう。特に仕事上の用事とか儀礼としてのコミュニケーションとは無縁といってよい高校生がこれらの媒体によって行うコミュニケーションには「おしゃべり」的要素が強いはずである。そのような視点から、高校生の電話や文章によるコミュニケーションの状況を調べたのである。

結論からいうと電話にしろ手紙類にしろ、女子は男子に比べて圧倒的に多くやりとりしている。週に5本以上の電話のやりとりをしているものは女子では42.6%に上るが、男子では30.2%。ほとんどやりとりしないか、しても1～2本というものは女子では31.8%だが男子は55.3%と半分以上である。また親しい友達とは平均どのくらいの時間話すか、という点についても、女子の場合2時間以上というものが6.4%（男子は0）いるのをはじめ1時間以上というものが64.9%もあるが、男子は19.7%だけで、10分以下が45.8%と多い。（女子は13.8%）電話をかける相手については男女とも学校の友人・先輩が半分以上で、学校での会話の延長として電話での会話があることが

察せられる。なお、携帯電話・PHS・ポケットベルなどを持っているものは女子20.2%、男子15.9%にとどまり、これは案外少ない印象である。高校1年生の調査なので半年ぐらい経つと様相が大きく変化する可能性もある。

郵便のほかにファックスや回覧文なども含め、手紙に類するものについても女子の場合は月に20通以上書くというものが17.0%もいるのをはじめ、多くが何通かは書いていて、ほとんど、または全く手紙を書かないというものは9.6%のみである。男子の場合は書かないほうが69.9%と圧倒的に多い。次に、月に5通以上は書くと答えた女子55人、男子9人に、複数回答可で、書く相手はどういう人かと聞いてみたところ、女子の場合は34人までが学校の友人や先輩であると答えた。電話と同じく会話の延長のような形でやりとりが行われているといえる。これらの中には授業中の回覧文のような形でのやりとりもかなりあるのだろう。いっぽう男子のほうは学校の友人や先輩に宛てるというのは2人のみで、学校外の友人（3人）や、応募・リクエスト（6人）などと答えたものが多かった。リクエストなどにはおしゃべりの要素もあるのだろうが、全般的には会えない相手への用件として書いていることがわかる。なお、ファックスや電子メールの利用者は男女とも数名にとどまっている。

また、女子では日記、週録、月録にかかわらず何らかの形で記録をつけているものが50.0%いたが、男子の場合は何も書いていないというものが88.5%である。書くこと自体に女子のほうが抵抗を持っていないとも言える。ただ、おもしろいのは「作文や小論文を書くことが好きか」という問いに対する回答で、「好きである」「苦にならない」を合わせ、女子は28.8%、男子は26.0%。「あまり好きではない」「非常に苦痛」を合わせ、女子は69.1%、男子は69.4%ということで、ほとんど差が見られないことである。日常的に、おしゃべりのいろいろ書いてはいても、いわば公的な作文や論文は得意ではない、という女子と、普段あまり書かない割には、作文・小論文を苦しめないという男子を比べると、Aの⑥や⑦と共通する傾向がここにも見られるともいえよう。

3 まとめ

さて、以上から結論として「男はおしゃべりでない」とは言えない。しかし「よくしゃべる」「しゃべるのが好きである」とするものが女子のほうに多いこと、また電話や手紙などの利用度の多さからすると、やはりしゃべる絶対量というのは今回調査した高校生の場合、女子のほうが多いのだろうと察せられる。「男がおしゃべりである」ということは女性に比べてしゃべる量が多いかどうかではなく、量はともかくとして「しゃべる」ということに対して「嫌いではない」し「苦にせずしゃべる」し、また沈黙をよしとする価値観に染まっていないという点に見るべきであろう。

さらに注目すべきは、男子が目上に対してとか、あらたまった場などでの会話を比較的苦にしない傾向、議論を避けない傾向で、これらは1でも述べた、従来男性に期待された公的な場での雄弁につながるものと言える。しかし、本調査や（小林1997）でも考察した通り、このような意識を支える日常の言語使用量や言語能力を男子高校生が必ずしも持っているわけではない。能力が確かでないのに自信を持ち得るとすれば、それは彼らが社会の中で置かれた位置や、彼らの自己認識に関する教育の成果、すなわちジェンダーの意識によるものといえるだろう。公的なものを担うという「男性」意識の根強さを感じないわけにはいかないのである。

参考文献

- 小林美恵子（1997）「自称の獲得」ことば18号 現代日本語研究会
重光由加（1993）「会話のパターン」日本語学12-6 明治書院